

“с мундиром на сабле” 再考

布施英憲

(1)

19世紀前半のロシア文学史上に、その不朽の名を残したロシア写実主義文学の確立者であり、国民詩人でもあるアレクサンドル・プーシキン（А. С. Пушкин, 1799-1837）の短編集『ペールキン物語』（Повести покойного Ивана Петровича Белкина, 1830年）は、作者の最初の散文小説であり、Н. В. Гогоりの『ヂカーニカ近郷夜話』（1831-32年）と並んで、ロシア文学における散文小説の礎を築いた記念碑的作品である、と言えよう。この短編集の簡潔、的確な文体は、ロシア散文小説の発展に大きな影響を与え、そのすぐれた模範となった作品でもあり、彼の散文は文学的散文の王冠である、とも言われる。

この短編集のなかに有名な一篇「その一発」《Выстрел》が入っている。主人公シルヴィオ（Сильвио）は、極めて非凡な才能と情熱を持ちながらも、社会生活においてはそれらが報われず、徒らに現実の卑俗さと対決し、それらを圧服することにのみその生涯をかける⁽¹⁾、と言う悲劇的な運命の主人公である。

この短編「その一発」の主人公シルヴィオは、ある些細なことからの決闘の際に、ある特別の意図をもって発射しなかった自分に“残された一発”を、決闘の相手にとって最も深刻な精神的打撃を与える時期まで留保して、ひたすら復讐の機会を狙う孤独な将校である。

ある日のこと、このシルヴィオがポーランド人地主の屋敷で催された舞踏会で、最近我が驍騎兵連隊に配属されてきたばかりの、若くて、才子で、しかも好男子の高貴な家柄の青年将校が、満座の婦人たちみんなの注目的になり、そのなかでも特に、シルヴィオと懇ろな関係にあっ

た、ほかならぬこの家の女主人公が、この若い青年将校に熱い視線を注いでいるのを見て、シルヴィオはこの青年将校の耳に、何かはしたくない決まり文句を囁いた。すると彼は噴然として色をなし、シルヴィオに満座のなかで平手打ちを食らわせた。忽ち二人はサーベルを取りに走りだした。その場にいた婦人たちはみな気が遠くなった。二人は引き離されたが、さっそくその夜のうちに決闘をすることになった。

夜明け方、シルヴィオが三人の介添人と一緒に約束の場所に立ち、言しようのない焦燥感にかられながら決闘の相手を待ち受けている場面があり、これに続いて次のような描写がある。

Это было на рассвете. Я стоял на назначенном месте с моими тремя секундантами. С неизъяснимым нетерпением ожидал я моего противника. Весеннее солнце взошло, и жар уже напевал. Я увидел его издали. Он шел пешком, с мундиром на сабле, сопровождаемый одним секундантом. Мы пошли к нему навстречу. Он приблизился, держа фуражку, наполненную черешнями.

夜明け方でした。僕は三人の介添人と一緒に、定め場所に立つてゐました。ゐても立つてもをられぬ気持で、相手の来るのを待つてゐたのです。春の日が昇つて、あたりはぼかぼかして來ます。すると遙か彼方に奴の姿が見えました。たつた一人の介添人を連れて、サーベルを軍服の下にだらしなく引きずりながら、徒歩でやつて來るのです。私達も彼の方へ進んで行きました。近づいて見ると、奴は櫻ん坊の一杯はひつた軍帽を手にしてゐるぢやありませんか⁽²⁾。

(神西清訳)

この決闘の場面を描写した箇所、下線を引いた部分“с мундиром на сабле”の訳は、神西清訳(昭和11年)では、上にある通り「サーベルを軍服の下にだらしなく引きずりながら」となっている。ところが、同じ年

に訳出された米川正夫訳では、この神西訳とは全く違った次の様な訳になっている。

それはもう明け方ちかい頃でした。僕は三人の介添人と一緒に、約束の場所に立つてゐました。何ともかとも云へないじりじりした氣持で、敵手を待つてゐた譯です。やがて春の陽がさし昇つて、あたりは次第に暖かくなつて来る。と、遙かかなたにやつ姿が見えました。軍服を刀で擔ぎながら、たつた一人だけ介添人をつれて、てくてく歩いてくるぢやありませんか。こちらはその方へ足を進めて行きました。やつは野櫻の實を一杯入れた軍帽を手を持つて、われわれの方へ近づいて来るのです⁽⁹⁾。

(米川正夫訳)

この米川訳では、この問題の部分は「軍服を刀で擔ぎながら」と訳されている。この神西氏と米川氏の両訳とを比較・検討して見ると、この“с мундиром на сабле”と言うロシア語の表現形式に対する解釈が、当時の日本におけるロシア文学の研究及び紹介の代表的研究者であったこの二人では、全く異なった解釈になっていることに気づく。すなわち、神西氏の訳では「軍服は着ており、その軍服が腰に吊っているサーベルの上になだらかに覆いかぶさっている」様態と解釈しているもの、と思われる。一方、米川訳では「軍服は脱いでおり、さらにサーベルも腰から外して、この脱いだ軍服をサーベルの上ののせて肩に担いでいる」と考えている様である。この“с мундиром на сабле”という表現形式に対する解釈が、当時の日本におけるロシア文学研究の大家であった神西氏と米川氏二人の間で、なぜ、かくも全く違った解釈になったのであろうか。また、作者プーシキン自身はこの表現形式で、どのような様態を描写しようと思つていたのであろうか。これらの点が、筆者がこの短編「その一発」を最初に読んで以来長らく気になっていた点である。

ところで、この短編「その一発」の日本における最初の翻訳は『戦争

文学』(明治38年2月発行)に載った三津木春影訳「射撃」であり、最も新しい翻訳は昭和45年に訳出された木村浩訳「その一発」(『世界文学全集10』集英社)である。この間にこの短編は実に17種類もの翻訳が出されている。

さて、本稿ではこの問題点について、明治以降今日までに翻訳されたこれら17種類の日本語訳を資料として、各訳者によるこの箇所解釈とその翻訳について、詳しく比較・検討し考察を加え、明治時代以来今日までに、このロシア語の表現形式が実にさまざまに解釈され、訳出されてきた事実を指摘し、この表現形式に対する筆者の解釈と見解を提示したい。

さらに、日本語以外の外国語への翻訳では、この問題の表現形式“с мундиром на сабле”は、どのように解釈され翻訳されているのであろうか。この問題についても、現在の時点で筆者が入手し得たこの短編「その一発」の外国語訳、英訳が3種類、独訳2種類、そして仏訳1種の計6種類の外国語訳を資料として、比較・検討し考察を進めてみたい。

(2)

まず始めに、この短編「その一発」《Выстрел》の日本における翻訳について少し触れておく。ナウカの『窓』に連載された佐藤繁好編「日本におけるプーシキン書誌」⁽⁴⁾によると、この短編の日本における最初の翻訳は、明治38年2月に発行された雑誌『戦争文学』に載った三津木春影訳「射撃」である。以後、今日までにこの短編の翻訳は17種類も出されており、その内訳は明治時代が3種、大正時代が2種、そして昭和になってからは12種類もの翻訳が出されている。これらの翻訳を年代順に挙げると以下の通りである。

- ① 三津木春影訳「射撃」『戦争文学』第2年2月の巻、明治38年。
- ② 梧桐夏雄訳「決闘(プシキン)」『帝国文学』第13巻第2～第3、

明治40年.

- ③ 與謝野寛, 茅野蕭々共訳「一撃」『新小説』第14巻第5号, 明治42年.
- ④ 白石實三訳「發射」『露西亞評論』第1巻第7号, 大正7年.
- ⑤ 山村 魏訳「發射」『プーシキン小説集』叢文閣, 大正10年.
- ⑥ 菊地仁康訳「發射」『プーシキン全集 第一巻』ボン書店, 昭和11年.
- ⑦ 米川正夫訳「残された一發」『露西亞短篇集』河出書房, 昭和11年.
- ⑧ 神西 清訳「その一發」『プーシキン全集 第三巻』改造社, 昭和11年.
- ⑨ 牟禮 亮訳「發射」『ベルキン物語』萬里閣, 昭和22年.
- ⑩ 伊藤職雄訳「決闘」『吹雪 外四篇』春陽堂 (春陽世界文庫), 昭和22年.
- ⑪ 中村白葉訳「その一發」『プーシキン小説全集 I』共和出版社, 昭和23年.
- ⑫ 高崎 徹訳「射撃」『スペードのクイン』衆人社, 昭和23年.
- ⑬ 小沢政雄訳「その一發」『ベールキン物語』大学書林 (語学文庫), 昭和30年.
- ⑭ 浅川道夫訳「残された一發」『ロシア短篇名作集』学生社, 昭和36年.
- ⑮ 小沼文彦訳「残された一發」『大尉の娘』旺文社 (旺文社文庫), 昭和43年.
- ⑯ 佐々木彰訳「射撃」『世界文学全集9』講談社, 昭和44年.
- ⑰ 木村 浩訳「その一發」『世界文学全集10』集英社, 昭和45年.

以上これら17種類の翻訳では、この問題の表現形式 “с мундиром на сабле” の箇所は、これらの各翻訳者によって一体どの様に解釈され、如何る表現に訳出されているのであろうか。筆者にとっては大変興味深いところである。この問題点について、上記の日本語訳を資料とし、さらにアカ

デミー版『プーシキン全集』の注解，ロシア人の native speaker の意見等を参考にしながら，各訳文を詳しく比較・検討し考察を加える。但し，⑥の菊地仁康と⑨の牟禮亮の訳文は全く同一であるので，両者は同一の人物であると思われるので，翻訳は結局16種類となる。

これら16種類の日本語訳をそれぞれ詳しく比較・検討して見ると，これらの翻訳は大きく次の様な四つのタイプ，または流れに整理できる。

- (1) 神西訳の流れを汲むと思われる訳：浅川訳，小沼訳。
- (2) 米川訳とほぼ同じ訳：中村訳，小沢訳。
- (3) 前記二者とは異なった，訳者独自の解釈をしているもの：三津木訳，與謝野・茅野共訳，白石訳，伊藤訳，高崎訳，佐々木訳，木村訳。
- (4) この問題の箇所が省略されて，全く訳出されていないもの：梧桐訳，山村訳，菊地訳。

以下に，各訳者によるこの問題の箇所の訳文を挙げて見る。

- (1) 神西訳「たつた一人の介添人を連れて，サーベルを軍服の下にだらしなく引きずりながら，徒歩でやつて来るのです。」
- (2) 浅川訳「たったひとりの介添人をつれて，サーベルを軍服の下にだらしなく引きずって歩いて来ました。」
- (3) 小沼訳「介添人をひとりつれて，サーベルを軍服の下にだらりとさげて，歩いてやって来るのです。」
- (4) 米川訳「軍服を刀で擔ぎながら，たつた一人だけ介添人をつれて，てくてく歩いてくるぢやありませんか。」
- (5) 中村訳「介添人をひとりだけ連れ，軍服をサーベルでかつぎながら，てくてく歩いてくるのです。」
- (6) 小沢訳「彼は軍服をサーベルでかつぎながら，一人の介添人をつれて，てくてくやってきました。」
- (7) 三津木訳「手甲じゅかぶをして，劔けんの上うへに制服せいふくを覆おほって，ただひとりただひとりの證人しょうにんと」

ある
歩いて来る。」

- (8) 與謝野・茅野共訳「唯一人の證人を伴れて正服の上着は脱いで劍の上にかけて、襦衣のまま徒歩で歩いて来る。」
- (9) 白石訳「彼は徒歩で軍刀をつけた軍服でやつてきた、一人の介添人に従はれて、…」
- (10) 伊藤訳「介添人を一人連れて、サーベルに制服を引掛けたのを持って、歩いて來ます。」
- (11) 高崎訳「彼はサーベルの先に軍服を引っかけ、介添人を一人連れててくてやつてきました。」
- (12) 佐々木訳「やつは徒歩で、脱いだ上衣をサーベルの上ののせて、介添人をたった一人つれてやつてくるのです。」
- (13) 木村訳「軍服を腰のサーベルにひっかけ、介添えをひとり連れて歩いてくるのです。」

また、この問題の箇所が全く省略されてしまい、訳出されていないものは梧桐訳、山村訳、そして菊地訳であるが、これらも参考までに挙げておく。

- (14) 梧桐訳「遠き方に彼の来るさま見よ。彼は徒歩し、介添人一人うち連れてたり。」
- (15) 山村訳「私は遠くに彼が来るのを認めました。彼奴は徒歩で、一人の介添人を従れてやつてきたのです。」
- (16) 菊地訳「やがて奴が遠くからやつて来るのが見えた。奴は一人の介添人を伴れて、てくてやつて来た。」

(3)

次に各翻訳者によるこの“с мундиром на сабле”の表現形式の解釈と訳文について、詳しく比較・検討し考察を加えて見る。

まず、神西清訳「サーベルを軍服の下にだらしなく引きずりながら」であるが、この訳文ではシルヴィオの方へ近づいて来る決闘の相手は「軍服を着て、しかもサーベルは腰に吊っている」と解釈されている。しかし、この表現“с мундиром на сабле”の形式で、ここで使用されている前置詞“с”の意味を「着用」の意に解するのは、ロシア語の前置詞“с”の用法としては無理がある様に筆者には思われる。もし、仮にこの“с”が「着用」の意味用法であるのなら、ここで使用すべき前置詞は“с”ではなく、むしろ“в”になるのではないか。

これに関連して、この箇所英訳について少し触れておきたい。この表現の英訳は次の様になっている。

I observed him in the distance. He was on foot, in uniform, wearing his sword, and accompanied by one second. We walked on to meet him⁽⁶⁾.

この英訳では“с мундиром”を“in uniform”と訳し、前置詞“с”を「着用」の意味と解釈し、英語の「着用」の意味を表現する前置詞“in”と訳されている。この英訳者は神西氏と同じ解釈をしている。また、浅川訳、小沼訳も神西氏と同じ解釈である。

しかしながら、この“с мундиром”と言う形式で「軍服を着用している」様態と解釈することは、前置詞“с”の用法としてはやはり無理である様に、筆者には思われる。この点は次の様な表現からも考えられる。この短編の始めの部分に、次の様な描写の一節がある。

Некогда он служил в гусарах, и даже счастливо; никто не знал причины, побудившей его выйти в отставку и поселиться в бедном местечке, где жил он вместе и бедно и расточительно: ходил вечно пешком, в изношенном черном сертуке, а держал открытый стол для всех офицеров нашего полка.

彼はもとひょうきへい驃騎兵連隊に勤めていて、昇進も順調だったのに、どんな動機から退職して、こんなわびしいいな田舎町に移り住み、貧乏くさいと同時に金づかいの荒い生活を送っているのかを、知る人はだれもいなかった。いつも乗物を使わず、くたびれた黒のフロックコートを着ているのに、わが隊の将校にたいしては、だれかれの別なく迎え入れて、もてなすのだった⁽⁶⁾。

(木村 浩訳)

この“ходил вечно пешком, в изношенном черном сертуке”と言う表現からも分かる様に、「くたびれた黒のフロックコートを着て」の意味は“в изношенном черном сертуке”となっており、前置詞は“в”となっている。

さらに、この問題の箇所ofのすぐ前に次の様な描写もある。“Весеннее солнце взошло, и жар уже напевал.” (春の陽がさし昇って、もはや暑くなりかかっていた)。この描写からも決闘の相手が軍服を脱いでやって来た、と考えることは必ずしも不自然ではない様に思われる。

また、アカデミー版『プーシキン全集』の注釈には、この“Я увидел его издали. Он шел пешком, с мундиром на сабле”の注釈として、次の様な Пушкин 自身の自筆のバリエントが挙げてある⁽⁷⁾。

Мы увидели его издали. Он шел без мундира,

この自筆のバリエントからも推測できる様に、この問題の箇所ofの最初の表現は“с мундиром”ではなく、“без мундира”となっていたことから、作者 Пушкин は「軍服を脱いで、着ていない」様態を想定していたものと思われる。以上の点から、この表現形式“с мундиром”を神西氏や英訳者の様に、「軍服を着ている」状態と解釈するのには無理がある、と筆者は考えている。

次に米川正夫訳「軍服を刀で擔ぎながら」はどうであろうか。この訳では、神西訳とは全く異なって「軍服を脱いで、それを刀に掛けている」

ことになり、さらに、この刀は腰から外して「肩に担いでいる」様態と思われる。しかしながら、この“с мундиром на сабле”の形式から「刀を肩に担ぐ」と言う解釈が可能であろうか。これもまたかなり無理のある解釈であると思われる。次に小沢訳「軍服をサーベルでかつぎながら」は中村白葉訳と全く同一である。この昭和23年に訳出された中村訳も、実は先行訳である米川訳「軍服を刀で擔ぎながら」と同じ解釈である。また、與謝野寛・茅野蕭々共訳については後で詳しく論ずる。

次に日本におけるこの短編の最初の翻訳である三津木春影訳では「劍けんの上うへに制服せいふくを覆おほつて」となっている。大正時代の白石實三訳では「軍刀をつけた軍服で」、また伊藤職雄訳は「サーベルに軍服を引掛けたのを持つて」となっている。三津木訳では劍と制服の両者の具体的な様態が良く分からない。次の白石訳ではこの日本語の表現自体の意味が不明であり、この訳では「軍服を着ている」ことは分かるが、この軍服と軍刀の両者の関係が分からない。最後の伊藤訳では「サーベルを腰から外して、そのサーベルに軍服を引っ掛けて手に持っている」か、または「サーベルの柄の部分に軍服を引っ掛けて、それを手で持っている」様態と二様に考えられる。しかし、この形式からサーベルを腰から外して、それを手に持っていると言う解釈が可能であろうか。次に高崎徹訳では「サーベルの先に軍服を引っかけ」と訳されて、伊藤訳に近い解釈となっているが、このサーベルの先に軍服を引っかけてとは、一体どんな様態なのであろうか。サーベルを手に持っているのであろうか。この解釈もこの形式からサーベルの「先に」軍服を引っ掛けていると解するのは、かなり不自然で無理があると思う。

最後に、佐々木彰訳「脱いだ上衣をサーベルの上うへにのせて」と木村浩訳「軍服を腰のサーベルにひっかけて」について検討をする。この両訳では「軍服は脱いで、しかもサーベルは腰に吊っている」様態に解釈しているものと思う。ではこの“с мундиром на сабле”と言う表現形式の具体的な様態は一体どのようなになっているのであろうか。先に述べた Пушкин の自筆のバリエーションからも分かる通り、軍服は脱いでいることは明らか

であろう。この脱いだ軍服をサーベルの柄の部分に引っ掛けて、決闘を目前にし、しかも将校らしからぬだらしない格好でやって来るのではないか。例えば、脱いだ軍服をサーベルの柄の部分に引っ掛けるか、または軍服を二つに折ってサーベルの柄の部分にのせることは、具体的な様態として、物理的にも十分に可能なことと思う。この点については後で詳しく触れる。

この問題の表現形式の解釈としては、木村浩訳「軍服をサーベルにひっかけて」が最も適切な訳と筆者は考えている。佐々木訳「脱いだ上衣をサーベルの上のにせて」も、佐々木氏から札幌大学教授相馬守胤氏への私信によると木村訳とほぼ同じ解釈と思われる。この解釈は明治42年の與謝野寛・茅野蕭々共訳「正服の上着は脱いで劍の上にかけて」と同じ解釈である。すると、この表現形式の解釈は、すでに明治時代の與謝野・茅野の共訳で正しく理解されていたことになる。ところが、これ以後の各翻訳者により以上に述べてきた様に、実にさまざまに解釈され誤訳されてきたが、昭和44年の佐々木彰訳と昭和45年に訳出された木村浩氏訳により、また再び最も適切な訳にたどり着いたことになる。これは大変興味深い翻訳のヒストリーを持った表現形式と言えよう。

この問題で、多くのことを教示して戴いた札幌大学名誉教授貝沼一郎先生、同大学外国語学部相馬守胤教授も佐々木彰氏、木村浩氏と同一の解釈を取られている。

(4)

次にこのロシア語の表現形式に関連して、若干の問題点に触れておきたい。

その第一の点は、この“с мундиром”と“на сабле”と言う表現形式は Пушкин のコンコードダンス (concordance) によれば、彼の全作品中で各々この箇所でのみ、しかもたった一度しか使用されていない極めて特殊な形態であること。

第二の点は、日本におけるスラブ語学の泰斗であった木村彰一氏のこの表現形式に対する見解である。実はこの短編《Выстрел》は、今から18年前の昭和51年度NHKラジオ「ロシア語講座」（応用編）の前期にテキストとして使用された。この時のこの講座の講師がスラブ語学者木村彰一氏であった。筆者は例の問題の表現形式を木村氏がどのように解釈し訳するのかを、大変興味を持ってこの箇所が放送される6月26日（土）を待った。しかしながら、木村氏が当日この箇所をどのように説明されたかは現在全く記憶にもなく、また当時のテキストを見ても何も書き込みやメモは残っていない。だが、今でも筆者の記憶に鮮明に残っていることは、木村氏がこの箇所の説明を終えた後で、「この表現 “с мундиром на сабле” の具体的な様態がどの様なものであるかは、良く分からない」と話したことである。その後間接的に聞いた話によると、木村氏は数人の native speaker にこの箇所を聞いて見たが、結局良く分からなかったそうである。

第三の点は、筆者自身がロシア人にこの箇所を聞いたことがある。それは昭和60年1月頃のことである。当時、札幌に滞在していた Пушкин と詩人小熊秀雄の研究者で旧ソ連邦作家同盟の会員であった A. И. マモーノフ博士を囲んで、ロシア文学の輪読会を毎週開いていた。ある時、筆者は例の問題の箇所をマモーノフ氏に尋ねて見た。すると、マモーノフ氏は暫くの間この表現を考えていたが、結局良く分からないので来週まで考えて来るとのことであった。しかしその後マモーノフ氏からは回答がないまま、氏はソ連に帰国された。このことから分かる様に、この表現形式は Пушкин の研究家であるマモーノフ氏にとっても、すぐにはその様態を想像し思い浮かべることが、相当困難な表現形式であった様に思われる。

以上、この表現 “с мундиром на сабле” という形式をめぐる、種々論じてきたが、この形式は Пушкин のコンコーダンスからも分かる様に、彼の全作品中にたった一度しか使用されていないと言う極めて特殊な形態であること、また木村彰一氏やマモーノフ氏の件からも推測される様に、ロシア人の native speaker にとっても、容易にしかもすぐにこの様態を

具体的に想像し、思い描くことはなかなか困難な表現の様である。

それ故であろうか、日本における明治時代以来この箇所の翻訳が、三津木訳から與謝野・茅野共訳、神西訳、米川訳、白石訳、伊藤訳、高崎訳、佐々木訳、そして木村訳と実にさまざまに解釈され翻訳される余地があったのであろう。

(5)

次にこの問題の表現形式 “с мундиром на сабле” の箇所は、日本語以外の外国語への翻訳では、どのように解釈され翻訳されているのであろうか。ここではこの問題について、現在の時点で筆者が入手し得たこの短編「その一発」《Выстрел》の外国語訳、英訳が3種類、独訳2種類、そして仏訳1種の計6種類の外国語訳を資料として、各翻訳者により、この箇所がどのように解釈され各国語に訳出されているのであろうか。外国語の訳文を詳しく比較・検討し考察を進めたい。

ここで資料として使用する各国語訳は、英訳が Gillon Aitken & David Budgen 訳, Ivy Litvinov & Tatiana Litvinov 訳, それに英訳者が不明のもの3種類である。独訳は Michael Pfeiffer 訳及び Johannes von Guenther 訳の2種, そして仏訳は André Gide et Jacques Schiffrin 訳の計6種類である。

これらを挙げると以下の通りである。

- ① Gillon Aitken & David Budgen 訳 《The Shot》⁽⁸⁾ *The Tales of Belkin*, 1990, pp. 29-42.
- ② Ivy Litvinov & Tatiana Litvinov 訳 《The Shot》⁽⁹⁾ *The Tales of Ivan Belkin*, 1990, pp. 21-36.
- ③ 訳者不明の英訳 《The Pistol Shot》⁽¹⁰⁾ 『ロシア短編珠玉集』昭和51年, 57頁～78頁.
- ④ Michael Pfeiffer 訳 《Der Schuß》⁽¹¹⁾ *Die Erzählungen des*

verstorbenen Iwan Petrowitsch Belkin, 1988, pp. 15-35.

⑤ Johannes von Guenther 訳《Der Schuß》⁽¹²⁾ *Der Posthalter*, 1966, pp. 9-25.

⑥ André Gide et Jacques Schiffrin 訳《Le Coup de pistolet》⁽¹³⁾ *La Dame de pique et autres récits*, 1990, pp. 18-33.

以上これら6種類の各国語訳では、この問題の表現形式の箇所はそれぞれの各翻訳者により、どのように解釈されそれぞれの各国語に訳出されているのであろうか、各国語の翻訳文を詳しく比較・検討し考察を進めてみたい。

以下に3種のこの箇所の英訳を挙げる。

[英 訳 1]

“The day was breaking. I stood at the appointed spot, attended by my two seconds. I awaited with inexpressible impatience the arrival of my opponent. The sun had already risen, and its rays were gathering heat. I observed him in the distance. He was on foot, in uniform, wearing his sword, and accompanied by one second. We walked on to meet him. He approached, holding in his hand his cap, which was full of cherries.

(英訳者不明, pp. 66-67)

[英 訳 2]

“It was the hour of dawn. I stood at the appointed place with my three seconds. I awaited my opponent with indescribable impatience. It was spring and the sun rose early, so it was already hot. I caught sight of him from afar. He was on foot, carrying his tunic on his sword, and accompanied by a single

second. We went to meet him. He approached with his cap, full of cherries, in his hand.

(Ivy Litvinov & Tatiana Litvinov 訳, p. 28)

[英 訳 3]

‘Dawn was breaking. I stood at the appointed spot with my three seconds and awaited my opponent with indescribable impatience. It was spring and the sun was already beginning to make itself felt. I saw him in the distance. He was on foot, his uniform-coat draped over his sword, accompanied by one second. We went to meet him. He approached carrying his cap, which was full of cherries.

(Gillon Aitken & David Budgen 訳, p. 35)

まず、英訳から検討してみよう。[英訳1]では、この問題の箇所 “Он шел пешком, с мундиром на сабле” は、“He was on foot, in uniform, wearing his sword,”と英訳されている。すなわち、“с мундиром”は“in uniform”, “на сабле”は“wearing his sword”と訳出されている。この英語の前置詞“in”の用法は、明らかに「着用」の意味であるから、この“in uniform”の部分は「軍服を着て」の意味である。この問題の表現形式“с мундиром”を、この英訳者は「軍服を着ている状態」と解釈した英訳になっている。しかし、このロシア語の前置詞“с”を「着用」の意味の用法に解釈することは、無理であることは既に詳しく論じておいた。

次に“на сабле”の部分は、“wearing his sword”と英訳されているが、この動詞“wear”の用法は、「(ある物を)身につけている, 着ている, 履いている」という状態を表現する動詞である。例えば, She wears glasses.

(彼女はメガネをかけている)の様に使い, また次の様な collocation で使用される: wear a coat, a clean collar, a sword, a cane, a watch, a ring, etc. よってこの英訳“wearing his sword”は「サーベルを腰に吊

っている」の意味である。一方、ロシア語の“на сабле”の方は、前置詞“на”の用法からしてあくまでも「サーベルの上に」の意味であり、このロシア語表現“на сабле”を、上記の英訳の様な意味に解釈するのは、無理であり誤訳であると思う。

次に Ivy Litvinov & Tatiana Litvinov 訳の [英訳 2] について考えて見る。この部分の英訳は“He was on foot, carrying his tunic on his sword,”となっている。この英訳では、どの様な様態を表現しているのであろうか。まず、動詞“carry”の用法の具体的な用例から考えて見よう。He is carrying a suitcase on his shoulder. (旅行カバンを肩にかついでいる)。She carried her baby on her back. (彼女は背中に赤ん坊をおぶっている)。これらの用例からして、“on his sword”の“on”は「接触」のonの意味で「～の上に接して」の意味用法であるので、Litvinov 訳“carrying his tunic on his sword”は「サーベルの上に軍服の上着をのせているか、または掛けている」状態と思われる。軍服の上着は脱いでおり、その上着をサーベルの先の部分にでも引っ掛けているものと思う。もし仮に「サーベルを剣帯に吊っている」と解釈したのであれば、英訳は“wearing his sword”としなければならない。以上の様に Litvinov の英訳では、この問題の表現は [英訳 1] の解釈とは異なって、「軍服を脱いで、その軍服をサーベルの先に引っ掛けて」手に持っている様態と解釈しているものと思う。

最後に、Gillon Aitken & David Budgen 訳の [英訳 3] に移ろう。この箇所英訳は“He was on foot, his uniform-coat draped over his sword,”と訳されている。この英訳では動詞は“drape”を使用している。この動詞“drape”の基本的な意味は“to cover or decorate (as if) with folds of cloth”⁽¹⁴⁾である。すなわち、「(衣類・掛け布などを) 優美にたらしめて掛ける、まとわせる、覆う」の意味である。例えば、drape a cloak over the arm (腕に上着を掛ける)、They draped the flag over the coffin. (彼等は棺に国旗をかぶせた) の様に使う。よって、問題の部分の英訳“his uniform-coat draped over his sword”は「脱いだ軍服の上着をサ

ーベルの上におおい被さるように掛けている」様態と解釈されよう。

以上のように、この問題のロシア語の表現形式 “с мундиром на сабле” の解釈については、[英訳 1] では「軍服を着て、サーベルを剣帯に吊っている」と言う解釈である。一方、[英訳 2] では「軍服を脱いで、その軍服をサーベルの先に引っ掛けて」手に持っている様態、そして [英訳 3] では「軍服は脱いで、その軍服の上着を剣帯に吊っているサーベルの上に引っ掛けている」様態と解釈している。各英訳者によって異なった解釈となっている点は特に注意したい。

さて次に、Michael Pfeiffer と Johannes von Guenther の独訳について検討して見よう。

[独 訳 1]

Dies geschah im Morgengrauen. Ich stand mit meinen drei Sekundanten am verabredeten Ort. Mit unbeschreiblicher Ungeduld erwartete ich meinen Gegner. Die Frühlingssonne war aufgegangen, und es wurde schon heiß. Ich sah ihn von ferne. Er ging zu Fuß, sein Uniformrock hing am Säbelgriff, und ein Sekundant begleitete ihn. Wir gingen ihm entgegen. Er kam näher, in der Hand hielt er seine Mütze, die voller Kirschen war.

(Michael Pfeiffer 訳, p. 24)

[独 訳 2]

Es war um die Zeit der Dämmerung. Ich stand mit meinen drei Sekundanten an der verabredeten Stelle. Mit einer unsagbaren Ungeduld wartete ich auf meinen Gegner. Die Frühlingssonne ging auf, und es wurde allmählich heiß. Endlich wurden wir seiner gewahr. Er kam zu Fuß, von einem einzigen Sekundanten begleitet, und hatte seinen Uniformrock an den

Säbel gehängt. Wir schritten ihm entgegen. Er näherte sich uns, in der Hand die Mütze, die voller Kirschen war.

(Johannes von Guenther 訳, p. 16)

M. Pfeiffer 訳の [独訳 1] ではこの箇所を“Er ging zu Fuß, sein Uniformrock hing am Säbelgriff,” と独訳し、動詞“hängen”を用いて訳出している。この動詞“hängen”の基本的な用法は「〔an et³〕(…に) 掛かっている、掛けて (下げて) ある」の意味であり、Das Bild hängt an der Wand.(絵は壁に掛けてある) ; Der Hut hängt an einem Hanken.(帽子は帽子掛けに掛かっている)の様を使う。よって、この Pfeiffer 訳では「脱いだ軍服の上着をサーベルの柄に掛けている」と解釈している。この Pfeiffer の独訳ではロシア語の“на сабле”を“am Säbel”としてではなく、“am Säbelgriff”とはっきりとサーベルの柄“griff”と解釈して訳出している。この様に“am Säbelgriff”「サーベルの柄の上に」と解釈している訳は、3種の英訳、2種の独訳、1種の仏訳のうちでも、この M. Pfeiffer の訳のみである。この訳は訳者 Pfeiffer がかなり具体的な様態を考えた上での独訳であり、このロシア語表現形式“с мундиром на сабле”の翻訳としては、最も適切な訳ではないかと筆者は考えている。

次に、J. von Guenther 訳“und hatte seinen Uniformrock an den Säbel gehängt.”について考えて見よう。この J. von Guenther の独訳では、この“с мундиром на сабле”と言う句形式の表現を“und hatte seinen Uniformrock an den Säbel gehängt”と言う節の形式で訳出している。ここでは動詞は他動詞“hängen”を使用しており、動詞の形態は「hatte …gehängt」と過去完了の形式を用い、しかも Pfeiffer 訳では“am Säbelgriff”と与格形式を用いて状態として表現しているのに対し、J. von Guenther 訳では“an den Säbel”と対格形式、すなわち「運動の方向」として訳出している。しかし、この J. von Guenther の独訳の意味は、二人のドイツ人のネイティブ・スピーカーの意見も聞いて見たが、「軍服をサーベルに引っ掛けて」の意であるとのことであった。また、このよう

な様態は実際に可能であるとの見解でもあった。しかし、筆者には J. von Guenther の訳はロシア語の原文のニュアンスが汲み取れていず、少し疑問が残る。

さて最後に、André Gide et Jacques Schiffrin の仏訳を検討して見る。

[仏 訳]

《Moi et mes témoins nous nous trouvâmes au point du jour à l'endroit désigné. Avec une impatience inexprimable j'attendais mon adversaire. Le soleil printanier se leva et mûrissait déjà. J'aperçus l'autre de loin : il s'avançait à pied, laissant traîner son manteau sur le sabre, accompagné d'un seul témoin. Nous allâmes à sa rencontre. Il tenait une casquette remplie de cerises.

(André Gide et Jacques Schiffrin 訳, p. 25)

この箇所は A. Gide et J. Schiffrin の仏訳では “il s'avançait à pied, laissant traîner son manteau sur le sabre, accompagné d'un seul témoin.” と訳されている。このフランス語の動詞 “traîner” の用法は「持って歩く、引きずる；身につけて回る、携帯している」の意味で、Il traîne toujours son parapluie. (彼はいつでも傘を持ち歩いている)；traîner toutes sortes de liveres dans sa serviette (鞆の中にあらゆる種類の本を詰め込んで持ち歩く) の様に使う。この部分の仏訳は、分詞構文を使用した表現形式 “laissant traîner son manteau sur le sabre” と訳されている。この仏訳も「脱いだ軍服をサーベルの上ののせるか、またはサーベルの柄の部分にでも引っ掛けて」いる様態を表現しているものと考えられる。

以上、ロシア語の表現形式 “с мундиром на сабле” をめぐって、この表現形式が日本語にはどのように解釈され訳出されてきたかを、またさら

に、6種類の英訳、独訳、仏訳の外国語訳を中心に、この表現形式がどう解釈されてきたかをも詳しく論じてきた。実にさまざまな解釈があり、種々の翻訳がなされてきたことが分った。しかも、このロシア語の表現形式は今日のロシア人のネイティブ・スピーカーにとっても、この意味と解釈がかなり困難な表現形式であることも指摘しておいた。

(6)

最後に、この問題の表現形式に対する解釈と訳文について、筆者の見解を簡潔に述べておく。

Он шел пешком, с мундиром на сабле, сопровождаемый одним секундантом.

彼はたった一人の介添人を連れて、軍服を腰のサーベルに引っ掛けて、徒歩でやって来るのです。

(筆者訳)

この表現形式“с мундиром на сабле”の具体的な様態については、「決闘の相手が、腰の剣帯に下げたサーベルの上に軍服を引っ掛けて、介添人をたった一人連れ、歩いてやって来る」ものと思われる。すなわち、決闘の相手は軍服の上着を脱いで、この上着を腰に下げているサーベルの柄の部分にでも引っ掛けて、決闘を目前にして将校らしからぬだらしない格好で、歩いてやって来るものと思う。

しかし、ここで問題となることは、脱いだ軍服の上着をサーベルの柄の部分に引っ掛けた状態で歩いて来るのが、はたして実際に、物理的にも可能な様態であるのか、という問題がある。

この点については、筆者はこれまでに種々詳しく検討した結果、この問題を考え始めてから25年近くも、軍人の軍服とサーベルとの両者の様

態について、映画や絵画の中の軍人の姿、また軍人の肖像画やその銅像などを注意深く観察した結果、サーベルの吊り方には二通りの帯剣の方法がある様に思われる。その一つは日本刀の様に、柄の部分の前方へ出す様にした吊り方である。この吊り方では、上で述べた様な様態は物理的に不可能である。もう一つの吊り方はサーベルが足の腿に対して平行に、しかもほぼ身体に対して垂直に、否、幾分サーベルの柄の部分が後方に傾き、サーベルの先の部分が前方へ出る様な吊り方である。この後者の様なサーベルの吊り方であれば、筆者の考えている様な様態は物理的にも十分可能である、と思われる。

次にではなぜ、この表現形式がかくも実にさまざまに解釈され、また今日のロシア人にとってさえも正確な意味の理解が困難なのであろうか。この点に関し筆者の見解を述べ本稿を終わりたい。

言語とは、人間が意志の伝達やその他の目的で相互に用いる音声による記号の体系で、ある特定の言語社会において通用する社会制度である。このロシア語表現“с мундиром на сабле”について考えて見ると、この言語形式で表現される状態なり様態は、当時19世紀前半のプーシキンの時代には、主人公シルヴィオは驃騎兵連隊に勤めていた将校であることから、当時の騎兵隊に勤務していた将校にとっては、このロシア語の表現形式で表現しようとしている様態は、すぐに、しかも容易に理解できたのではないか。それはプーシキン自身は軍人の経験は全くないのに、この様な表現形式を用いることが出来たのは、彼自身が以前に、当時の将校がこの様な様態をしているのを、すでに何度か見た経験があるから、この様な表現形式を用いることが出来たのではないかと思う。当時は、この言語形式とこれにより表現された様態とが一体となっていたので、この表現形式は、当時の人々にとっては理解の上で特別に困難はなかったのではないか。

ところが、時代が経過し、言語形式のみがそのままの形式で現在まで伝えられて来たが、今日では驃騎兵連隊もなくなり、この様な格好をする将校もいなくなると、当然今日この表現形式を解釈し理解する時には、

今日我々が目にすることの出来る現在の将校の軍服とサーベルの両者の関係を安易にイメージ化して解釈することになり、上で論じた様に実にさまざまな解釈がなされて来たのではないか。

外国語からの翻訳の問題を考える場合、その言語形式によって指示される物体なり状態・性質が、現在すでに存在しない場合には、翻訳者は特別な注意を払う必要があるのではないか。

(平成6年8月22日脱稿)

[注]

- (1) 黒田辰男編『世界文学鑑賞辞典 ロシア・ソヴェト編』東京堂出版, 昭和48年, 269頁～270頁。
- (2) 神西清訳「その一発」『プウシキン全集 第三巻』改造社, 昭和11年, 89頁。
- (3) 米川正夫訳「残された一発」『露西亞短篇集』河出書房, 昭和11年, 36頁～37頁。
- (4) 佐藤繁好編「日本におけるプーシキン書誌 (翻訳・研究・紹介文献目録) 第1編～第9編・補遺」『窓』第56号～第65号, ナウカ, 昭和61年～昭和63年。
- (5) 小西友七編注『ロシア短編珠玉集』英宝社, 昭和51年, 67頁。
- (6) 木村浩訳「その一発」『世界文学全集10』集英社, 昭和45年, 245頁。
- (7) Пушкин, А. С. Полное собрание сочинений, Академия наук СССР, 1940, том 8-2, стр. 596.
- (8) Alexander Puschkin, *The Tales of Belkin* (Translated by Gillon Aitken and David Budgen) London: Angel Books, 1990, pp. 29-42.
- (9) A. Pushkin, *The Tales of Ivan Belkin* (Translated from the Russian by Ivy and Tatiana Litvinov) New York: Ameron House, 1990, pp. 21-36.
- (10) 小西友七編注『ロシア短編珠玉集』英宝社, 昭和51年, 57頁～78頁。
- (11) Alexander Puschkin, *Die Erzählungen des verstorbenen Iwan Petrowitsch Belkin* (Aus dem Russischen von Michael Pfeiffer) Frankfurt am Main: Insel Verlag, 1988, pp. 15-35.
- (12) Alexander Puschkin, *Der Posthalter* (Aus dem Russischen Übertragen

- von Johannes von Guenther) Stuttgart : Philipp Reclam jun., 1966, pp. 9-25.
- (13) A. S. Pouchkine, *La Dame de pique et autres récits* (Traductions de Gustave Aucouturier, André Gide et Jacques Schiffrin) Paris : Gallimard, 1990, pp. 18-33.
- (14) Paul Procter, *Longman Dictionary of Contemporary English* London : Longman, 1987, p. 310.